

少年少女
日本文学館

24

現代児童文学傑作選

gendaijidōbungakukessakusen

2

与田準一
筒井敬介

よだ
じゅんいち
けいつ
けいすけ

佐藤さとる
神沢利子

かんざわ
としこ
ほか

少年少女
日本文学館

24

現代児童文学傑作選 2

与田準一 佐藤さとる
筒井敬介 神沢利子

講談社

913 今江祥智 寺村輝夫 いぬいとみこ あまんきみこ
小沢正 与田準一 立原えりか 佐藤さとる 神沢利子
平塚武二 安房直子 長崎源之助 筒井敬介

少年少女日本文学館 24

現代児童文学傑作選 2

講談社 1987

274 p 23cm

内容：ちょうちょむすび おしゃべりなたまごやき 七まいのおりがみと……
くましんし きばをなくすと 海の中の歌 星からきたひと おぼあさ
んの飛行機 おいらはおいらのもん たまむしのずしの物語 きつねの
窓 焼けあとの白鳥 雨ですてきなたんじょう日

いまえよしとも てらむらでるお いぬいとみこ あまんきみこ おざわただし よだじゅんいち たちほらえりか
さとうさとる かんざわとしこ ひらつかたけじ あわなおこ ながさきげんのすけ つついいすけ

少年少女日本文学館
第二十四巻

現代児童文学傑作選 2

定価 一四四〇円
(本体 一三九八円)

一九八七年八月十八日 第一刷発行
一九八九年十二月十日 第三刷発行

著者……………今江祥智 寺村輝夫 いぬいとみこ
あまんきみこ 小沢正 与田準一 立原えりか
佐藤さとる 神沢利子 平塚武二 安房直子
長崎源之助 筒井敬介

発行者……………加藤勝久

発行所……………株式会社 講談社

東京都文京区音羽二一二二二二一

郵便番号 一一二

電話 東京(〇三) 九四五一一一一(大代表)

印刷所……………株式会社廣済堂

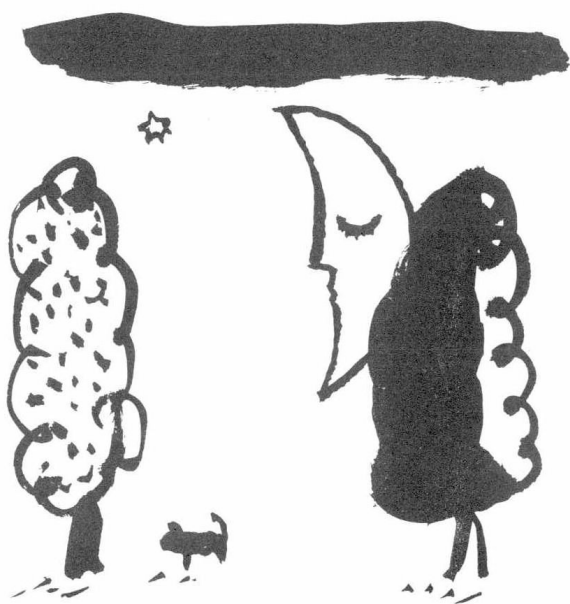
製本所……………黒柳製本株式会社

◎今江祥智 寺村輝夫 いぬいとみこ あまんきみこ 小沢正
与田準一 立原えりか 佐藤さとる 神沢利子 平塚武二
安房直子 長崎源之助 筒井敬介 一九八七年
落本・乱本は、小社書籍製作部にてお送りください。送料小社負担にておとりかえし
ます。なお、この本についてのお問い合わせは、児童図書第一出版部にてお願いいたします。

Printed in Japan
ISBN4-06-188274-0

(児一)

も
く
じ



いまえよしども
今江祥智

ちようちよむすび……………8

てらむらでるお
寺村輝夫

おしやべりなたまごやき……………20

いぬいとみこ

七まいのおりがみと……………36

あまんきみこ

くましんし……………62

おさわただし
小沢 正

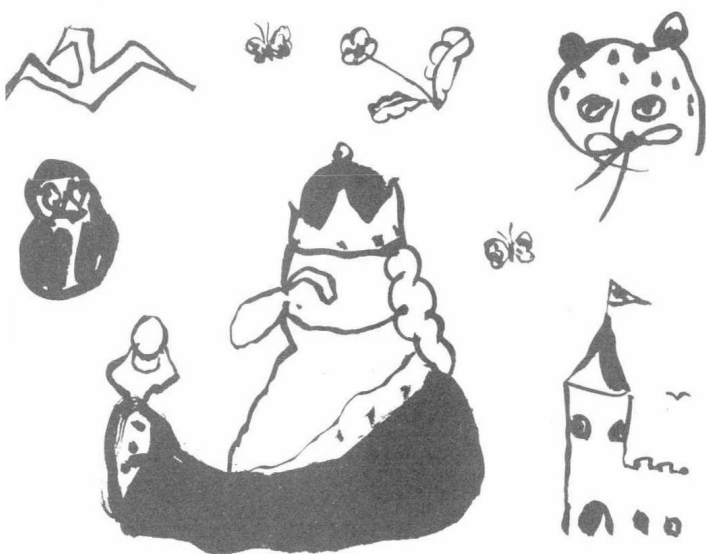
きばをなくすと……………76

よだじゅんいち
与田準一

うみなかうた
海の中の歌……………90

たちほら
立原えりか

はし
星からきたひと……………104



佐藤さとる	112
おばあさんの飛行機	112
神沢利子	150
おいらはおいらのもん	150
平塚武二	162
たまむしのずしの物語	162
安房直子	184
きつねの窓	184
長崎源之助	202
焼けあとの白鳥	202
筒井敬介	220
雨ですてきなたんじょう日	220

● 略年譜	258
● 随筆	252
● 解説	244
山下明生	252
滑川道夫	244



◆この本の本文表記について

- 現代かなづかい、現代送りがなを使用した。
- 極端な宛て字と思われるもの、また代名詞・副詞・接続詞などのうち原文を損なうおそれが少ないと思われるものをかなにあらためた。
- 本文は総ルビとし、むずかしい語句や事項には、小さな字で注を加えた。注と本文ルビが重なる場合は左側にルビをそえた。
- さらに説明を必要とする語句や事項には、*をつけ、イラストやくわしい注をつけ加えた。

現代児童文学傑作選
2



今江祥智
いまえ よし とも

ちようちよむすび



ちようちよむすび

アフリカのみどりの森^{もり}に、あかるい朝^{あさ}がやってきたのに、ヒヨウのとうさんは、げんきがありません。むすこのペポネのかおをみては、しんぱいそうに、くびをかしげています。そして、かあさんとかおをみあわせては、ためいきばかりついているのです。

ふたりがしんぱいするのも、むりはない。ペポネには、ひげがちつともはえてこないのです。ひげのないヒヨウなんて、アフリカじゅう、いや、世界^{せかい}じゅうさがしたって、みつからないにきまっています。

ペポネにひげがないことは、もちろん、うまれたときからわかっていました。しかし、なにし

ろ、うまれたてのあかんぼうのこと、そのうちにはえるさと、とうさんヒヨウは、氣にもとめなかつたのです。

ところが、いつまでたつても、はえてこない。これでは、うつかりそとへつれてあるけません。なかまたちに、からかわれるにちがいありませんからね。

かあさんヒヨウは、ペポネのはなのまわりを、ていねいに、なんどもなめてやりました。だけどもだめ。

赤い月がジャングルの空にのぼる夜ごとに、かあさんヒヨウは、月にいのりました。

—どんなひよりとしたひげでも、けっこうです。どうか、はやしてやってください。

しかし、やっぱりはえません。

とうさんヒヨウは、しかたなしに、森いちばんのものしりの大フクロウのところへ、そうだんにでかけました。

話をきいて、大フクロウは、ホッホッとわらいながらいいました。

—そうさな。こんな話はきいたことがないな。さすがのわしにも、けんとうがつかぬが……そうそう、おひげのあるさかなでもたべさせてはどうかな。

(たいへんこまつたときには、たよりにならないものまでも、たよりにするとうたえ)

おほれるものはワラをもつかむ、どんなことでもやってみようという気持ちです。とうさん
ヒヨウは、ジャングルの川へとんでいきました。めぎすのは、もちろん大ナマズ。できるだけひ
げのながいやつをねらって、えい、パシャーン！

たちまち半ダースほどつかまえて、はん(六)びき。一ダースは十二を一組とする、ものの数え方おおいそぎでもってかえりました。

ーペポネ、たべてごらん、おいしいよ。

ペポネは、うへへ、なんだかきみのわるいやつだなあ、とおもいましたが、すなおなむすこだっ
たので、パクリパクリと、ぜんぶたいらげてしまいました。

ナマズのひげがのどにひっかかって、ちよっぴりくすぐったかったけど、がまんしてね。

さて、あくる朝、あさとうさんとかあさんは、ペポネのはなのまわりを、あなのあくほどみました
が、だめ。はえていません。

ーまだ、たりないんじゃないの？

ーうん。もっともつと、たべさせよう。

とうさんは、また、ジャングルの川へ。えい、パシャーン！ たちまち半ダース。

ーペポネ、おいしいよ、これ。

ペポネは、ツルリツルリとのみこみました。

さて、あくる朝、とうさんとかあさんは、目をまんまるにして、ペポネのはなのまわりをみつめましたが、——やっぱりはえていない。

—こんなことは、つづけなきやね……。

—そうともさ。よし、いくぞ。

とうさんヒヨウは、また、ジャングルの川へ。えい、パシャーン！

なん日もなん日も、えい、パシャーン。はい、おいしいよ。うん。ツルリツルツル……がつづきました。けれど、おひげはシヨンボリともはえてこない。

そしてある雨の日、おそろいであそびにきたクロヒヨウ一家のおてんばむすめ、ポポに、とうとうみつかってしまいました。

—あら、ペポネちゃんったら、おかしいの。

—なにがさあ。

—だって、ペポネちゃんったら、おひげがないんですもの。

—おひげだって？

ペポネは、あわてて、はなのまわりをひとなでしてみました。
ない。

ペポネは、じぶんにひげがないことを、はじめてしりました。

うふふ、おかしいの……と、ポポはまだわらいやめません。

—いいさ、おひげなんて。まだ、子どもなんだもん。

—あらいやだ。だって、ヒヨウは女おんなの子でも、おひげはちゃんとするのよ。

ポポは、じぶんのひげをピピンとはってみせました。

—いいさ、いいさ、いまにはえるさ。

ペポネのとうさんは、あわてていいました。

しかし、クロヒヨウ一家いっかがかえって、半日はんいちもしないうちに、ペポネにひげがないことは、ジャングルじゆうにしれわたり、ヒヨウはもちろん、ライオン、スイギュウ、ゴリラ、キリン、ゾウから、おしまいにはバクやアリクイにいたるまで、ペポネの家いえ——といってもあなですが——のまえにあつまって、ワイワイがやがや……。

これではまるで、みせもの。といっても、こんなには、おこつておいはらうことも、でき

ません。

きつとポポのおしゃべりのせいにちがいない。これだから、女の子のおしゃべりはおそろしい……と、とうさんヒヨウはばやきましたが、もうおいつきません。

とうさんとかあさんは、あなのおくでちいさくなっていました。でも、ペポネはちっとも気にしないようすで、のんきなかおをして、あなのまえでひなたぼっこ。

—ないぞないぞ！

—ほんまや、あれへんな。

—んだんだ。ふんとにおかしなこつだべ。

なにをいわれても、ペポネは、すこしも気にしない。

（ひげなんかなくなつたつて、ヒヨウはヒヨウだもの！）とおもっているのですから、へいきなのです。でも、とうさんとかあさんは、へいきではいられない。その日のま夜中、ペポネをつれて、家を、いや、あなをでました。夜にげです。ペポネにひげがはえるまで、かえらないけっしんです。

ペポネは、しらないところへいけるのがうれしくつて、にこにこしてついでいきます。とうさ

んヒヨウは、ジャングルの川にそって、上へ上へのぼりました。ジャングルのおくのおく、けものたちも、めったにこない、ふかいふかいみどりの世界でした。

月の赤い夜、ジャングルのおくへきえていったペポネ一家のことは、そのご、すこしずつ、ジャングルのけものたちのあいだから、わすれられていきました。

それから、どれくらいすぎたところでしようか。道にまよったウサギが、川にそっていけば、なんとかなるだろうとあるいていって、かえって、よけいに道にまよってしまったことがあります。川下へでるかわりに、川上へはいりこんでしまったのです。

どこまでいっても、はてしなくつづくみどりの世界。ところが、ひよっこり、川ぎしにこぼれるくらいさいている青い花をみつけて、うっとりとながめたウサギくんは、とびあがるくらいおどろきました。その花のあいだに、のんびりねそべっているのは、ヒヨウなのです。ウサギくんは足がすくんで、にげることもできません。

そのとき、ヒヨウがひよいとふりむきました。そのかおをみて、ウサギくんは二どびっくり。なぜって、そのヒヨウには、ちょうど、ナマズのひげみたいにながいおひげが、ひよろりとは